

浄土

1988—5

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回（一日発行）
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別投函認許） 第三三五号
昭和六十二年四月二十五日印刷 昭和六十二年五月一日発行
第五十四卷

五月号

いふはにほへとち
れはるをわがよた
むそつ
からむう
あくや
ふこえてあさきゆ
めみしるひもせす

ねのな
あのみ
まけ



五月の秀句

詩の五月はマロニエの花の五月

秋元 不死男

五月富士夫病床をいつ捨てむ

石田 あき子

明け暮れのひとりに夏の立ちにけり

渡辺 桐花



五月号



其の土の衆生、このこえを聞きお
わりて、皆ことごとく仏を念じ、
法を念じ、僧を念ず。

——『阿弥陀経』

目次

——特別連載 第1回——

中国の道教と道教文化……………王 明……(2)
〔解説〕安居香山

《連載随想〔2〕》

日中友好は衣にまかせ……………高橋良和……(9)

=にこにこ法話①=

ミーちゃん恋をする……………長谷川 岱 潤……(14)

関通上人に学ぶ(下)……………正 村 瑛 明……(21)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <14>

海と山の狭間で……………木 下 隆 一 ……(28)
——唱歌と童謡(4)——

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第47回……………寺 内 大 吉……(35)
弥陀の化身 挿絵 松濤 達文

——表紙絵 小林治郎画——

特別連載 第一回

中国の道教と道教文化

中国社会科学院哲学研究所

研究員 王 明

〔解説〕 安居香山

（大正大学学長）

〔解説〕 中国の宗教を代表するものとして、儒教、仏教、道教があり、一般に儒仏道三教と呼ばれている。この中、特に道教は中国固有の宗教であると共に、後漢末（二世紀末）に成立して以来、民衆の宗教として広く信仰された。戦後、中国本土では一時衰微したが、また再興さ

れつつある。台湾や香港、東南アジア方面では盛んに信仰されている。こうした道教がどんな思想や文化を持って、社会的に影響しているかを知ることが、意義あることと考える。

幸いここに、中国の道教研究の代表的学者である王明先生より小論が送られてきたので、本

誌に数回にわたって掲載頂くことにした。やや難解な内容もあるので、敢えて解説の労を取った。

王明先生は一九一一年、浙江省の生れで、北京大学を卒業後、中国哲学史、道教史を研究されている権威者である。特に道教の經典である『太平經合校』の著作は、道教研究に取って欠くことのできない労作として、高く評価されている。この論文は、研究所での講義録である。

中国の道教文化は非常に豊かな内容をもつが、ここでは道教の哲学思想・道教の主な方術・道教の文学芸術並びにその名所旧蹟等の三つの方面からその概略を述べてみたい。

(1) 道教の哲学思想

道教の哲学思想について述べると、それは本体論、政治思想、倫理思想など、三つの部分に分けることが出来る。

◇ ◇ ◇ 王明先生

◇ ◇ ◇ 略歴



中国社会科学学院哲学研究所研究員。中国哲学史学会副会長。一九一一年、浙江省樂清県に生る。一九三七年、北京大学中国文学部卒。一九四一年、同大学文学研究所卒業。専攻は中国哲学思想史及び道教史。主な著作には『太平經合校』、『抱朴子内篇校釈』、『無能子校注』、『道家と道教思想研究』など多数。王明先生は中国における道教研究の権威である。

この論文は王明先生が昨年八月、中国社会科学学院哲学研究所が主催した『中国歴史文化研修班』での講義録に手を加えられたものである。

(一) 本体論 道教の本体論とは即ち「道」

である。「道」という概念は『老子』の五千文から出たものである。しかし、道教徒がいつているところの「道」は必ずしも『老子』本来の意味に合っているものではない。そこには二種類の相反する観点が存在する。一つは、原始物質（「氣」或いは「元氣」）を生み出すことができ、従つて天、地、人及び万物をも化生することが出来るという考え方であり、もう一つは、「道」とは即ち原始的物質であるとする考え方である。最初の段階では、「道生万物を生ず」と「元氣は万物を生ず」を並べて論じていた。つまり「道」は「氣」に相当していた。それから更に一歩進んで「道は氣なり」又は「道即ち元氣なり」と明確に表現するようになった。道教の理論家達は、各々このような両説を主張しているが、大多数は後説に傾いている。

〔解説〕 中国思想を研究する場合、日本では「道家」と「道教」と区別する。道家とは老子・莊子の思想家を中心とした諸子百家の一つを言い、その思想的な流れを道家として捉える。これに対して、道教とは後漢末に成立した中国固有の宗教を指し、深く民衆に信仰された。そして老子を太上老君と神格化して祀ったり、『老子道德經』を聖典として用いるようになり、思想的にも影響を受けて、教儀を確立した。「道は万物を生ず」とするのは、老子や道家の考え方で、これが更に展開して「道は氣なり」にまで進んだ。そうした点を、王明氏はここで指摘しているわけである。

(二) 社会政治思想 これについては民間道

教と神仙道教とがあり、両者は決して同じではない。原始道教は民間に流行した道教で、比較的社会的底辺に生きる大衆の苦しみを



——道教總本山・北京白雲觀、牌樓（入口の門）——

理解出来たので、貧しい人々の要求を代表している。それ故に、封建制地主階級の残酷な搾取と圧迫に対しては、反抗的であり、徹しくそれを暴露している。例えば、後漢の末、太平道のリーダーである張角が組織した農民蜂起軍は「蒼天已に死し、黃天まさに立つべし。歳は甲子にあり、天下大吉」という革命のスローガンを出している。原始道教の經典である『太平經』にも、財物は天下の所有物で、共に人々の生命を養うものであり、人々は唯自分達の労働によって生活を維持すべきものと考えており、残酷な封建的搾取や暗黒な政治を批判している。このような観点は正に民衆の願望と要求を反映したものであるべきであろう。

民間の道教活動が政府軍に鎮圧された後、それにとって代ったのは、上流社会の利益を代表する神仙道教であった。それは次第に勢

力を増し、道教の主導的地位を占めるようになった。そして、それは保守的正統思想である儒教思想と合流して、封建支配階級の政治思想と一体化し、それに奉仕するようになった。

〔解説〕 後漢末に黄巾の乱というのが起った。後漢王朝衰微に伴なう農民反乱であった。張角がその中心的人物で、「黄天まさに立つべし」のスローガンで、治病などしながら民衆を集め戦った。後漢滅亡の主要因をなしたのであるが、一面これが原始道教へと形成されて行つた。そして時代の推移と共に、道教教団の成立となつていくのであるが、不老長寿などを旗じるしにしたところから、神仙道教へと傾いていった。王明氏は、そうした経緯を簡略に述べておられるのである。

(三) 倫理思想 原始道教の経典——『太平

経』は戦国時代の諸子百家の一つである墨家の生活原則を受け入れ、自分達の労働によって生活を維持すべきであると強調したことは既に述べた。墨子は社会生活の上からみれば、小生産者の階級に属し、当時の農民や手工業者を代表していた。この階層は非常に不安定な生活状況に置かれていたので、三項目の助け合い運動を提唱し、力のある者は他人を助け、財産のあるものは他人に与え、良い生活手段があれば、お互いに教え合うべきだと主張した。墨家のこの三項目の相互扶助運動は、『太平経』の作者にも受け入れられ、更に宗教的色彩が加えられて次のように主張されている。即ち、力の強は者は力の弱い者を扶養し、億万の財産を積む者は貧しい者を救い、その急場をみたすべきである。そして、よい生活手段をもつ者はそれを他人に教えるべきである。若し、これが実行出来ない場合、彼

らの罪は免除することが出来ない。このように、『太平経』の中には、すでに「公平」とか「平等」の思想も芽生えている。これも又抑圧された民衆の願望と要求に外ならない。

神仙道教はそれと違い、儒教の忠、孝、和、順、仁、信等の道徳行為を神仙修行の根本条件としている。神仙修行が広がるにつれて、彼らの強調したものは原始道教とは反対に、封建階級の社会秩序と尊卑貴賤の倫理思想であつた。これらの思想は逆に神仙の世界にもとり入れられ、封建支配を維持する一つの柱となつた。これは神仙道教の「科戒」の中にも最もよく表われている。「科戒」とは即ち悪質行為を禁止するという意味である。

道教の戒律には、五戒、十戒、二十七戒、百八十戒、三百大戒など各種各様の戒律があるが、世俗的な倫理道徳では、忠と孝を最も重視する。例えば、父母や目上に反逆、不孝

であつてはならないとか、君主に謀反し、国に害を及ぼしてはいけなとかである。更に例を挙げると、他人の物を盗むべからず、女性を犯すべからず、私欲のために陰謀をめぐらし他人を陥し入れるべからず、人を中傷するべからず、奴隸を買売するべからず、他人の婚姻を破壊するべからず、自殺するべからず、恨みのために人を殺すべからず、投書して人を陥し入れるべからず、みだりに伐採すべからず、毒藥を池、沼、川、海に投下すべからず、などなどで、これらは皆世俗的道徳の要求になつてゐる。又、裸体で露天で入浴すべからず、天に向つて唾を吐くべからず、魚鱗の時殺生すべからず、酒を好み肉を食つて戒律に違反すべからず、淫りに鬼神を祭るべからず、などで、これらは皆神仙道教の規律に属するものである。又『老子説一百八十戒』という書物に出てくる「若しも人が汝を

罵れば、汝は只黙して聞き、言い返すべからず」とか、「若し人が悪をもって汝に対せば、汝は善をもってこれに報え。恨むべからず」などという戒律は、キリスト教のバイブルの内容と酷似している。中国道教のこのような忍辱と謙譲の精神は、多分に先秦道家——『老子』の争わない思想に源を求めることが出来る。しかし、これも又宗教家の共通した信念に相通するものであろう。

〔解説〕 王明氏は『太平経』の専門家であるので、ここで比較的詳しく述べておられる。『太平経』の成立には、いろいろとまだ未解決の問題が多いが、原始道教時代のものであろうとされている。その後、仏教が中国に伝来し、道教の成立に大きな影響を与え、教団の成立や、經典の形式なども、仏教にならって組織的にされた。また儒教の教えなども取り入れ、封建支配に適するようなものも作られた。現代中国の思

想家は、思想的には、どうしても共産イズムに立脚する為、そうした立場で思想や、宗教を捉え勝ちで、そうした面がこの小論にもでてゐる。しかし、仏教も道教も今日その存立を認めており、宗教を否定しない。ただそうした見方が、この論文の所々に著われていることは、お読み頂けば分るであらう。

安居 香山著

五月書房選書

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

四六判／上製／口絵二頁

定価一、六〇〇円（十二五〇円）

五月書店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五

電話 〇三―二三三―四一六一

振替 東京九―三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇―一四六三

日中友好は衣にまかせ



高橋良和
たかはしりょうわ

人がいる。

その人は本宗の浄土宗の勸学であり、大僧正であった林彦明師である。

林勸学は京都百万遍本山の法主であったが、当時本宗の管長選挙があったときに、推せん

今こそ日中友好、日中親善と、誰もが口にするし、また日中友好のためのいろいろな運動が展開されているが、この日中親善のことを昭和十二年の日華事変の以前から、仏教による日中の親善を念頭に立ってすすめていた

されて競争になったので、自ら法主を辞任して、その後、後輩の養成のために知恩院の宗学研究機関の上首に迎えられ、常在して若い人々と起居をともしにして研究指導にあたった。

そのころといっても日華事変の前に、日中友好の大切さを考えて、日華仏教研究会を結成して広く各宗に呼びかけた。

林勸学は唯識の権威であり、各宗の学者や高僧とも親交があった。高楠順次郎博士や法隆寺の佐伯定胤大僧正、清水寺の大西良慶大僧正とはとても懇意で、よく随行したことを思い出す。

当時の若い人々のなかには、塚本善隆博士や道端良秀先生、関精拙老師などがいた。

日華仏教研究会は、「日華仏教」という機関誌を持ち、中国仏教徒との交流が考えられていた。

というのも当時の中国の仏教徒として夏蓮居士、天津に帰雲鵬居士という元将軍が、熱心な念仏者であった。

特にそのなかでも北京の夏蓮居士は、自分の家に念仏者の結集を行うほどであり、この居士が林彦明勸学に便りしてきて、日中の親善のために、日を決めて日中同願念仏会を営みたいと連絡してきた。

これをよろこんだのは、林彦明勸学で、毎月二十五日を期して、この念仏会が両国仏教徒で実施された。

これは林勸学の主唱で、宗務も協賛して、全国の浄土宗の寺院で、実施されることとなり、各宗のうちでこうした両国仏教徒の親善を行ったのは、本宗が最初である。

この親善運動とは別に、当時の軍部はさらに戦火を拡大し華北、華中とほとんどん侵略していった。

しかし一方においてこの親善は、いくさと同関係がなく、中国からの留学生を迎えたり、またこちらからも親善使節が派遣され、いよいよ深く親善をつづけていくことになった。これは、昭和十四年のころである。

林勸学が率先して、日中親善のために、中国に赴くことになった。旅客機などはまだなかった時代に、林勸学は数名の人々をひきいて中国に赴いた。

そのころは釜山から、京城そして満州に赴き、そして山海関を経て北京に至った。京都から六十数時間の旅である。もちろん途中下車して各所の寺院に訪問しては、日中親善の重要性を説いた。

そのころ北京には、本宗の開教所があつて、当時の内務部街（今は無い）に、北京別院が、開設されていた。別院には華北の開教総長として柴田玄鳳師がいた。

そしてこの別院に逗留して中国仏教徒との交流を深めた。特に夏蓮居居士の大きな邸宅に赴いて、日華の仏教徒が、念仏したことは、非常に印象的であつた。

次の日である。以前から華北軍司令部に陳情していた杉山寧陸軍大將と、林勸学との懇談の申入れが、許可されてる通知を、別院宛にきていることを知った。

これは珍しいことで、林勸学としては、ねがったり、かなったりであり、大よろこびであつた。

それで指定の時間に、この軍司令部の門をくぐった。

軍司令部では副官である松井大佐が迎えてくれて、早速応接間に入った。いくさのなかのことである。杉山軍司令官という華北軍の最高の大將が、面接しようというのであるから、実におどろいた。戦時中のさ中に、こん

なことが出来るのか、こちら側の方がもう一つおどろいた。

この軍司令部は、工場か学校の建物を占領していたのであろう。長い廊下を通って杉山軍司令の執務室をノックした。

約束の時間であったから、司令官は椅子にどっかと腰をおろして、軍刀を両手でもっていた。

威風堂々たる軍人である。そのすずめで椅子に坐った林勸学は紫衣をまといていた。

カーキ色ばかりのこの軍司令部に紫衣の僧、もちろん随行もわたし以外は、略衣と袈裟をつけていた。

なにかしらアンバランスな風景である。

あいさつが終ると、杉山軍司令官が、この度の日華事変のことで、その意図するところをはなしてくれた。

うなづいていた林勸学は、今回の訪問のこ

とと、日華仏教徒の交流親善についての信念についてはなしたのであるが、問題はその後である。

林勸学は、あのおちついた口調で、わたしたち仏教徒は、なんとか日華の親善のために努力しております。両国は仏教国であります。

そこでいくさのことは、閣下の軍隊におまかせいたしますが、友好とか親善には無理です。この衣におまかせください。

といってもっていた中啓で、自分の胸をたたいてみた。

わたしはおどろいた。さすが杉山軍司令官はにっこりと頬笑んでいた。それよりおどろいたのは、この軍司令官の副官である松井大佐である。

顔色かさっと変った。我々の顔色もおそらくこの林勸学のことばに、おどろいてけいれ

んしたのかもしれない。

その後数分間懇談して、再び長い廊下を通って前の応接間にかえってきた。

軍司令官との会見のあとほっとして、洪茶をいただいているとき、先の副官の松井大佐がやってきた。そしてやや緊張した態度で、

ちょっと申しあげますが、今会談のときに、林大僧正は、いくさは軍人で、日華の親善は衣におまかせください、とおっしゃいましたときに、自分はおどろきました。軍司令官は、まことに寛大な度量であるのにおどろきました。杉山軍司令官でありますから、あのことばには黙って終りましたが、これから華中や華南に赴かれてあちらの軍司令官にもお会いのことと存じますが、そのときには今のようなことばを申されると、大変なことになりますから。

とまことに厳粛な口調で言われた。

その通りである。いくさのさなかに軍隊の批判などは、あのころは許されないことである。

随行の我々もおどろいた。

しかし林勸学であつてこそ、あのことばが出たのである。

日華の親善にいのちを捧げたこの勸学であつたこそあのことばが出たのであらう。

そう思うと、今さらながらその信念の強さに感心した。

そのとき随行した人たちは、誰も生存していない。

もちろん林勸学も終戦前に、中国から軍の飛行機で、日本にかえってこられて、自坊の沼津の乗運寺で逝去している。

話は聞かぬに消えているので、今この話を思い出してつづつてみた。

に　こ　に　こ　法　話

〔1〕

ミーちゃん恋をする



ミーちゃんはさっきから机に向かっているのですが、ちっとも宿題が手につきません。徹君とのあのことが思い出され、気になってしょうがないのです。

今日一日、徹君は先生に逆らってばかりだったし、放課後の掃除もふてくされてちっともしようとしません。みかねてミーちゃんが徹君に文句をいい、けんかになってしまった

のです。

「徹君、家でなんかおもしろくないことでもあったのかもしれないけど、掃除ぐらいちゃんとやってよ」

「うるせえな、やってるだろ」

「やってないじゃない、私たちも早く帰りたいのよ、その列の机ぐらい並べてよ」

「やだね、おれ帰るよ」

はせがわ
長谷川 岱 潤

(東京・品川区戒法寺住職)

「ひどい、なんて人、みんなさっさとやっちゃいませよ」

「ミーちゃん、今日徹君なんかへんね」

ユミちゃんがミーちゃんをなだめるように言いましたが、ミーちゃんは一人で怒っていました。

でも家に帰ってきてから、ミーちゃんはすっかり落ち込んでいました。

『私って、なんて嫌な人間なの。一人で優等生ぶっちゃって、恥かしい。徹君、家で何があったんだろう……』

「えーと、この算数の問題は、うーん、わからないよー。だいたいこんなこと勉強して何になるの」

と、叫んだとき、今日徹君が同じことを先生に質問したことを思い出しました。

「先生、こんな算数の公式覚えたって、生活に何にも関係ないじゃないですか」

「徹、それからみんなもよく聞きなさい。そういうことを少しでも考えるところからの受験競争から落伍者になるぞ」

ミーちゃんもそのときは、徹君変なこと言うなあ、と思いました。でも、今冷静になってみると、先生って随分乱暴なことを平気でいうんだなあと思うようになったのです。そうしたらまた急に徹君が近ずいたような気がして、なおのこと気になり出してしまったのです。

そんなとき、お母さんが部屋を覗き込んで言いました。

「ミーちゃん、おつかいいしよに行かない」「行く行く、ちょうどあきちゃったところ」

ミーちゃんはお母さんの左手を両手でぎゅっと握りしめて歩いていきました。

ミーちゃんは寂しかったのです。そして駄々っ子になって妙に甘えたかったのです。

「変な子ね、どうしたの」

「いいの、こおさせて」

スーパ―に入るとミーちゃんは欲しいものを次から次へと籠の中に入れ始めました。

「ミーちゃんどうしたの、こんな物要らないわよ」

お母さんは少し怒ったような口調で言いました。

「いいの、欲しいのよ。これくらい買ってよ」

「何言ってるんですか。わがまま言うんじゃないやありません」

ミーちゃんがお母さんと言ひ合いをしていると、徹君が側を通りました。

「あ、徹君じゃない、何持ってるの」

「あ、ミーちゃん、何でもないよ」

徹君は素早く手に持っているものを隠しました。

「いいじゃない、見せてよ」

と言うなり、ミーちゃんは徹君の後ろに回り込みました。

「あ、湯飲み茶碗。でもちょっと地味ね。お母さんの」

「う、うん」

「あ、さっきは御免なさいね、偉そうなこと言っちゃって」

「僕の方こそ、みんなに迷惑かけちゃって、みんな怒ってただろ」

「ううん、みんな心配してたけど。あ、お母さん、私、徹君と帰るから、さっきの好きにして」

「じゃ、買わないでいいのね」

「いいよ、もう要らなくなっちゃった」

ミーちゃんは、何故かうきうきしていました。それは自分でも恥かしいくらいでした。

「徹君、いっしょに帰ろう」

「う、うん」

二人はお勘定が済むとゆっくり歩き出した。

「ミーちゃん、俺がお茶碗買ったの、クラスみんなには内緒にしてね」

「うん、いいよ、でもどうして徹君がお茶碗なんか買ったの」

「ミーちゃんには見つかったんだからしょうがないか。この間の日曜、母の日だったじゃない」

「そうそう、私はチーちゃんといっしょに赤いカーネーションあげたよ」

「うちはさ、俺ひとりだからそんなこと恥かしくて出来ないからさ。何にもしなかったんだけど、せめて外に遊びに行かずに、家にてあげようと思ってさ。家でテレビ見ていたら、内のおふくろのやつ、今日は母の日なのよ、少しはお母さんに感謝してくれたら、なんて聴こえよがしに言うものだからさ、つい

頭にきて、『そんな日知らないよ』って言ったら、横でいっしょにテレビ見ていたおやじまでが、『お前何言いちやる、今日ぐらいお茶碗でも洗うの手伝ってこんか』って怒鳴るもんだから、ふてくされながらお茶碗洗っていたら、おふくろの茶碗おちっちゃったんだ。そうしたらおやじがむちゃくちゃに怒ったんだ。でも何故かおふくろが笑いながら俺の味方してくれたんだけど、俺もう頭に血が昇っちゃって、家を飛び出しちゃったんだ」

「徹君って短気なんだから」

「それからさ、おやじがちゃんと弁償しろってうるさく言うもんだからさ。ここのところおやじと口利いてないんだ」

「お母さんは何か言ってる」

「おふくろは、気にしない気にしないって笑っているんだ。俺、自分がしたこと悪いと思ってるんだけど、どうも謝れないんだよな」

「それで今日お茶碗買ったのか。徹君って偉いな。そのが茶碗渡すとき、私いっしょに行つてあげようか。そういうときって照れるのよね」

「そうしてくれる、俺、なんて言つて渡したらいいのか考えてたんだ」

二人は徹君の家に着きました。

「ただいま、母さんは」

「今、おつかいだ」

奥からお父さんの声がしました。

「ミーちゃんどおする」

「う、うん、お父さんでもいいか」

二人はしずしずと奥の部屋に아가って行ききました。

「お父さん、これ」

徹君は茶碗をお父さんの前に置きました。

「何だ、茶碗か。お前これ返すのに、いちいち女の子に連れ添ってもらつてきたのか。こ

の意気地なし」

お父さんはこぶしを振り上げながらふるえる声で言いました。

「お父さん、待つて、私の話も聞いて」

「あなたはもういいから帰りなさい」

「そんな、ちょっと待つてよ」

ミーちゃんは何度も哀願しましたが聞き届けてくれません。

「ミーちゃん有り難う。もう帰つていいよ」

徹君の辛そうな声にミーちゃんは張りさけんばかりに悲しくなり走つて家に帰りました。

ミーちゃんは部屋ですつと泣いていました。自分のしたことが徹君にとつて、かえつて災いしてしまつたことの悔しさと、情けなさにミーちゃんには泣くしかありませんでした。

「ミーちゃん、入るよ」

ミーちゃんのお父さんが心配して部屋に入ってきました。

ミーちゃんはお父さんにことの始終を話しました。母の日に徹君が何処にも行かないで、お母さんの側にいてあげようとした、その優しい心をちっともわかるうとしない徹君の両親については、特に怒りをこめて話しました。

「お父さん、私のしたこと間違っていたの。少しはおせっかいだったかもしれないけど、徹君ほんとに困っていきそうだったから、それに徹君も、いっしょに行ってあげるって言ったとき、とつてもうれしそうだったんだよ」

切々と話すミーちゃんの勢いに押され、お父さんも少し困りながら言いました。

「ミーちゃんのしたことは間違っていないよ。でもね、間違っていないこと、正しいことをしたからといって、人が傷つくこともあるんだよ。それに間違っていない、私は正しいと頑張っても、思いどおりにいかないことなかたたくさんあるんだよ。ミーちゃんは今度の

ことで、そのことをよく覚えておくといいよ」
「お父さん、そんなこといったら私何もできなくなっちゃう」

「ミーちゃんは今までどおり正しいと思ったことはどんだんやればいいのさ。ただ今日のことを覚えておいて、思いどおりに行かなくてもくよくよしないようにするのさ。仏さまはそのことを忍辱^{にんじく}って言っているよ」

「にんにく、変なの」

「今度そういうことがあったら、『にんにくにんにく』って称えてごらん。辛い気分がすつとんじやうよ」

「お父さん、有り難う」

ミーちゃんの表情が少し明るくなったので、お父さんは安心して部屋を出ました。

「お母さん、今日はミーちゃんの話聞いて、大人である我々が教わったような気がするよ、『優しい心』って何かってね」

◎『維持会員』へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。『浄土』誌はいよいよ五十四巻に入り、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく思っています。しかし、弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

関 通 上 人 に 学 ぶ

(下)

正 村 瑛 明

(東京・北区正受院住職)

事勿れ。

塚間とは墓地のことです。

関通上人は、誰れも振り返えらぬ憫體を法林という尼僧にとりにやらせる。雨の中、墓場へ行つて頭蓋骨を掘り出して来るなどというのは、尼僧といえども氣味のよいものでは

或時上人、弟子の法林といふ尼に命じて憫體を求めに遣し給ふ。折しも降雨はげしく、尼二人して塚間に至り、求むるに七つを得て上人に献ず。上人喜悅かぎりなく、是予が師匠なり、同行なり、知識なり、学問なり。汝ら常に思ふて忘るゝ

ない。だから、友を連れてゆくのです。

そこで、恐る恐る掘り出してみる。あのすさまじいされこうべを手にして何を感じたであろうか。恐れおののきつつ、何ものかをさつたにちがいない。

一つならず、次々と掘り出して、七つも手にした尼僧たちの心の中に、師の命の何であったかが明白になっていったのであろう。

だから、師の教示に対して、質問などはない。ただ、感涙肝に銘じて、お念仏の中に礼拝合掌して去ってゆくのです。

目前の楽しみは、素直に楽しめばよい。しかし、その根底に無常というものをしっかりとすえていないと、生き方が浮わつたものになり、やがて、手痛いしっぺ返しを喰うことになる。

むしろ、この無常に徹してみるとよい。今まで気づかなかった世界に瞳目させられるで

あろう。

爪を切った 指が十本ある

大正十五年四月七日に、小豆島の墓守堂で一人淋しく四十二歳の生涯を閉じた尾崎放哉という人の句です。

私たちは、爪を切った指が二十本ある、といえど驚くかも知れぬが、十本あると詠んだからといって驚かぬ程鈍感になってしまったのではないか。そんなことでは、生き方が深まらんぞ、と私に迫ってくる句です。

駄馬は鞭でうたねば走らぬというが、駿馬は振り上げた鞭の影に驚いて走るといふ。

私たちは、今一度、この無常観というものを人生のありように取りもどしてゆきたいと思ふ。

美しや障子の穴の天の川

病床に身を横たえて久しい俳人芭蕉が、首をめぐらすと、汚れた障子の一隅が破れてい

ることに気づく。何とはなしに、その破れ穴の向うに視線をのぼすと、満天に輝く天の川がまたたいている。しばし眺めるうちに万感胸にあふれてこの句が誕生した。

人の世の無常と自然の妙有の不可思議にうたれる心情が一幅の絵となって切りとられているようだ。

と同時に、天の川を芭蕉の心にしみにませたのが、何の価値もないと思われる破れ障子の穴であったというところが尊い、といひの人もある。なるほど、破れ穴は、あるいは作者自身の姿であるかも知れない。

いづれにしても、この驚きと不可思議に出会って、人間はいよいよ謙虚になり深まってくる。

二十八歳の春、江戸遊学を終えての帰路、関通上人は、箱根の関所をこえた。手形なしには関所は通過できないことに啓示を受け、

越すに越されぬ生死の関は、南無阿弥陀仏の手形でこえるしかないと決定した。

拙しや身のありさまは雲くも介けよ

心斗こぶりは 関通くわんつうりける

と詠んで、以後、自らを関通と称するようになるのです。

そのように信心決定した関通上人は、身内を次々と仏門に入れてしまします。

それは、もう、見事なものです。

父母、第三人、妹二人。ところが、その妹の一人は、すんなりと出家に承諾しなかった。すると、上人は、自ら剃刀かみそりを取って妹の髪を切って剃髪してしまします。

上人の妹なる女性、念仏の助縁制度を勧め給えども、即席に諾し給わざりしが、上人、自ら剃刀を取って、緑の黒髪をおし切って、棄恩入無為、真実報恩謝の義を示し給ふ。

ほんとうに、受けた種々の恩に報いる道と
いうのは、ちっぽけな自我を中心にした生活
を離れて、自他共に生かし合う深い生活を生
活することです。自他共に喜び深まる生き方
の中で、一体感をもって共感共鳴してゆく清
らかな生活を生活することです。

生死の煩しさから解放される道をお念仏の
中に自得されていました上人は、時に激しい
行為をもって人を導きます。

しかし、本当は親切なのです。やさしいの
です。思いが深いのです。

普通、激しい人はやさしさが足りないし、
やさしい人は激しさが足りない。

関通上人はこの両方をもっている人です。
仏の心は、慈悲心です。慈悲心は訳すと、
抜苦与楽の心だといえます。

激しくなければ、苦を抜くことはできぬ
し、やさしくなければ楽を与えることはでき

ない。

私たちは、無常の世に暮らす同行人として、
本当の意味での激しさとやさしさを生活の中
に、もっと取り戻したいと思う。

病中九日の間、日夜枕の辺りを不離して
看病ありしが、日来のつかれに、師（関
通上人のこと）少し眠り玉へば、照誉、師
を驚かして、これ和尚ねむり玉ひそ。我
今西邁（浄土往生）の時至れり、我、年来
和尚の恵に依って課仏十万返を修す。こ
れ過分のことも也。追付息絶えんとあれば、
師、照誉の頭を左の手にてかかへ、右の
手にては金幣をうち、念仏をすすめ、最
後二十余返、高称念仏し、如入禪定遷
化し玉へり。（中略）中陰二七日の建夜の
百万返勤修の中に、累日の降雨に依って、
佐屋宿の堤きれて、近里民家悉く大水難
にあへり。然りといへども、師は、水難

中には勇猛に中陰追善丁寧なりし。時に、五七日の夜、師、夢現のさかいを不覚知^{はとけまへ}、仏前にましましし。御丈五

尺の立像金色の弥陀尊、来現し玉ひ、直に堂外へ如来出で去り玉へば、師、如来の後より、こはいづちへ去り玉ふと、いだきとめ玉へば、先師照蒼上人なり。そのとき照蒼告げての玉はく、我上品上生に生ずと。告げてかきけす如くうせ玉へり。師落涙百行なりし。いよいよそれより、念仏し玉へる事勇猛なり。

上人の師である照蒼上人は、六十六歳で往生遷化される。

その看病から、臨終の行儀、七日七日の中陰の御法事を綿密につとめたのは二十一歳の関通上人です。

臨終行儀とは、生涯ただ一度の実践作法ですが、お念仏をすすめ、称名を援助してくれ

る友が必要です。その絶対の信頼と友愛の中で、御仏の来迎を受けるのです。

何と莊嚴な最期であらうか。

そのような臨終を迎えられるかどうかは知らないが、そういう信頼と友愛の中で最期は迎えたいと願っている。

そう願うことによつて、少しでも、この殺伐とした世の中に潤いをもたらしたいと念じている。

そうした信と愛に満ちた人間関係を身近かなところからでも、取りもどしてゆくことが大切だと思う。

人間が人間らしく人間をまっとうしてゆく根本に信頼と愛情がある。

その深い信頼と限りない愛情の源泉が信仰生活であり、お念仏の生活です。

この深い信頼と限りない愛情をもつて私たちに對するお方こそ如来親さま、阿弥陀さま

です。

私たちは、親にしてもらったように他に對し得らるるように心がけ実践してゆこうとするものです。

平等にわけへだてなく、そのまま受け容れ育んで下さる如来親さまの心を心として一生を全うしようとするものです。

その究極は、如來さまとの一体感です。

前掲の行業記の中では、不覺知とあります。不覺知というのは、何気なく、自然に、意識せずに、ということです。

ほんものは、皆、この不覺知です。

笑うのでも泣くのでも、笑ってやろう、泣いてやろうというのはにせものです。ほんものは思わず笑うのであり、思わず涙するのです。

体操の選手でも、考えているうちは二流だと申します。考えて考えて、考えの尽きたと

ころまで修練をつんで、もう、演技そのもの無心になつてできるところまでゆくのだそうです。

お茶のお点前でも、考え乍らのお点前ではお茶になりません。このお茶を一心からさしあげたいというまごころが自然と作法になつてゆく中で、主客一体の世界を味わうものです。

不覺知の呼吸というものを私たちは忘れてはならないと思います。

まだまだ、学ぶべきところは無尽蔵にありますが、関通上人から私が学びました一端を述べさせて頂きました。ありがとうございます。

(了)

好評の新刷

『浄土』誌連載の珠玉の回想記

父と母、そしてふるさとへのはるかな想いをやさしく綴る

『み仏とともに』

——父母に捧ぐ浮生の記——

大正大学学長

安居香山著

B6判 二〇〇頁
定価 一八〇〇円 千二〇〇円

△発行△ 山喜房仏書林

千130

東京都文京区本郷五―二八―四
(振替) 東京 〇―一九〇〇

海と山の狭間で

—唱歌と童謡(4)—

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゆう}
一^{いち}

第二次童謡ブームは終戦直後に始まり、約十五年間続いた。海沼実という作曲家の出現が、この童謡ブームに火を点けたと言っても過言ではないだろう。海沼は戦前から童謡曲を書いてきたが、最も活躍したのがこの時期で、児童合唱団「音羽ゆりかご会」と主宰し、その中から川田正子・孝子という逸材を発掘して、戦後の童謡界に不動の位置を占めたのであった。

戦後数年、レコード業界は沈滞していた。レコードのプレス工場はコロムビアのものが

只一つ焼け残っただけで、他社はコロムビアにプレスを委託して、細々と営業する有様であった。またレコード盤の原料も欠乏していた。終戦と同時に、それまでの思想がすべて否定されたから国民は戸惑ったが、レコード会社も同様で、占領軍の忌諱に触れない方法を模索したが見当がつかなかったし、歌手は兵役にとられて生死不明だったり、慰問団として外地に行ったきりになっていたり、戦災で行方不明だったりしていたし、戦時歌謡に筆を染めた多くの作詞家や作曲家は、占領軍によって追放されるのではと戦々恐々で、それこそ歌どころではない時代でもあったのである。唯一の放送機関であるNHKも、占領軍の厳しい監督下に置かれていた。

唱歌の教材についても、文部省はなんら対応できず、「軍国主義的なもの、超国家主義的なもの、神道に関係のあるものは排除する」という指示が出されたのは、ずっと後になってからであった。その点童謡には排除しなければならぬような歌は殆ど無かった。戦時色が濃くなった昭和十四年以降に発表されて、今もよく歌われている「仲よし小道」(昭14)「ナイショ話」(昭14)「あの子はだあれ」(昭14)「リンゴのひとりごと」(昭15)「船頭さん」(昭16)「たきび」(昭16)「あかちゃんのお耳」(昭17)などを見てもよく分かることとで、レコード会社もNHKも、先ず童謡に活路を見出した。明治、大正、昭和と蓄積された数多くの童謡が思わぬところで役立ったのである。

戦後の童謡で初のヒットになったのは、海沼実作曲の「里の秋」だった。これは昭和二十年十二月二十四日NHKで放送された「復員兵歓迎特別番組」で発表されたもので、大

好評を博した。詞が作られたのは昭和十六年十二月の開戦直後で、作詞家の齊藤信夫は当時千葉県の船橋で小学校の教員をしていた。招集された父を、母と二人で偲ぶという設定の歌で、「星月夜」という題がついていたが、

静かな静かな 里の秋

お背戸に 木の実の落ちる夜は

ああ 母さんと ただふたり

栗の実 煮てます いろいろばた

明るい明るい 星の空

鳴き鳴き 夜鴨の渡る夜は

ああ 父さんの ああ笑顔

栗の実 食べては 思い出す

という歌詞には、戦時色など微塵も無い。出稼ぎに行った父を偲ぶ歌と言っても充分通用する内容である。もともと二番までしかなかったが、後に「復員だより」という番組のテーマ曲に採用された時、NHKの要請で、

さよならさよなら 椰子の島

お舟に ゆられて帰られる

ああ 父さんよ 御無事でと

今夜も 母さんと 祈ります

が書き如えられた。歌手は勿論海沼実の秘蔵っ子で、当時のトップスター川田正子であった。「里の秋」は「復員だより」のテーマ曲になったおかげで、あっという間に全国に拡がって行った。

伊東市宇佐美から亀石峠を越え、大仁を経て伊豆の西海岸に抜ける道がある。古来伊豆半島の東西を結ぶ数少ない道の一つで、源頼朝が伊東祐親の娘八重姫に会うため、はるばる配所蛭ヶ小島から通いつめた道であったと私は推理しているが、宇佐美から亀石峠に至るまでは、道路が整備された今でも九十九折りの急坂で、頼朝もさぞ難渋したことであろう。その中程に、「みかんの花咲く丘」の歌碑が建っている。つまり戦後最大のヒットとなった童謡「みかんの花咲く丘」は、伊東が発祥の地であると主張しているのである。初めてその碑を見た時、私は奇異な感に打たれた。瀬戸内育ちの私は、この歌は場所特定できないにせよ瀬戸内海のある所で作られたものとはかり思い込んでいたからである。私だけでなく、海に臨む蜜柑の産地で、前に島が見える所に住む人であれば、大方はそう思っているはずである。

みかんの花が 咲いている
思い出の道 丘の道

はるかに見える 青い海
お船が 遠く かすんでる

黒い煙を はきながら

お船はどこへ 行くのでしょうか

波にゆられて 島のかげ

汽笛が ぼうと 鳴りました

いつか来た丘 母さんと

一緒に眺めた あの島よ

今日も一人で 見ていると

やさしい 母さん 思われる

なるほど、歌碑がある所に立つと、この詞そっくりの情景が展開する。波静かな伊東湾の先は相模の海で、左手には初島が、中央よりやや右手に大島が、そして中央はるか遠く

三浦半島が霞んでいる。今では燃料に石炭を使う船もなくなったので、黒い煙を吐く船は見られないが、船も多く行き交っている。私が初めて碑の前に立ったのは、七、八年前の小春日和の日であった。足許の斜面も、谷を隔てた向かい側の山も、麓まで蜜柑畠で、たわわに実った蜜柑が燦々と午後の日に輝いていた。初夏、蜜柑の花の咲く頃であれば、ここまで甘い馨が漂って来て、一層歌の味わいを深くするのではと思ったが、何故「みかんの花咲く丘」が伊東に有らねばならぬのかという疑問は、その後ずっと私の心に残っていた。しかしその疑問は、ダークダックスの喜早哲が書いた「日本の抒情歌」の一節を読んだで氷解した。

それによると、昭和二十一年九月二十三日、海沼実（NHKから、二十五日夜八時放送の「空の劇場」の中で川田正子が歌う新曲の作曲を依頼された。この番組は、伊東市の西小学校の校庭と東京のスタジオとを結ぶ、当時としては画期的な二元生放送であった。技術的なことはよく分からないが、伊東というのが距離的には当時の中継放送の限界だったのかもしれない。恐らく三浦半島の山頂にアンテナを立てて二段中継をしたのであろうが、伊東が選ばれたのは、途中に中継の障害となる山などの遮蔽物が無かったからだと思われる。二十四日、海沼は雑誌記者の加藤省吾に、「海に島が浮かんでいて、船が煙を吐いて航海している」のをイメージして詞を書けと言った。加藤は童謡詩人でもあったから、三十分程で書き上げて「みかんの咲く丘」と題した原稿を渡すことができた。静岡県人の加藤は、蜜柑の花の馨を海沼のイメージに添え、亡き母を偲ぶというセンチメンタル

なオブラートに包んで、歌を一層完璧なものにしたのであった。海沼はその日の午後伊東へ向かう車中で作曲し、翌二十五日放送は無事終了した。伊東市に「みかんの花咲く丘」の歌碑があるのには、こんなエピソードがあったのである。それにしても、食糧難に喘いでいた昭和二十一年に、奇しくも歌謡曲では「りんごの唄」が、そして童謡では「みかんの花咲く丘」と、果物を題名にとった歌が大ヒットしたのは何かの因縁であろうか。どちらも当時都会では、ちょっとやそつとでは手に入らない貴重品だった。

昭和二十年代の後半からは、団伊玖磨、中田喜直、大中恩、湯山昭、服部公一等新進作曲家によって数々の佳品が生まれてきてはいるが、今一つアピールしないのは、昔のように子供のスター歌手が歌うということがなくなったからではないかと思う。昔なら童謡を歌っていた年代の子供たちが、歌謡曲の分野でこまっちゃくれた恋の歌など歌っているのが現状で、第三次童謡ブームと言われている今日、それを支えているのは、ダークダックス、ボニージャックス、安田祥子、由紀さおり（安田章子）、島田祐子といったオジサン、オバサン達で、歌の殆どは過去のヒット曲なのである。今の童謡の欠点を挙げれば、スター歌手の不在と、詞に物語性が無く、曲が子供には難解なことの二点に絞られるかと思う。

立ち止まるな善導

〈47〉

寺四大吉

挿絵・松濤 連文

弥陀の化身

四

病み衰えた身に突如として食欲が湧いてきた。燈火が燃え尽きる直前の異常発光みたいだ、と善導自身も告げた。その譬喩どおりで、翌朝は粥椀に眼をそむけ、ひと箸も染め

ようとはしなかった。夕餉には進んで蜜の熱湯を求めたが、鼻先へ持っていただけで置いてしまった。

「やすむ——」

投げ捨てるように言った。

「はあ……」

憚良たちは言葉を真意をとらえ兼ね、顔を見合わせた。



善導は身を横たえて睡眠をとった例がない。いつも結跏趺坐をしたまま眠るのである。それが「やすむ」とはどういうことであろう。

「そこにある蘆（こさ）で床を敷きのべて下さい」

こまかい指示を与えた。草庵の隅に古蘆が二枚あった。終南山から移り住んできたとき、身まわりの品をくるんできたものであった。

「二枚とも敷きのべますか」

尼が訊きかえた。

「一枚は上掛けにする……それからこの草庵を、わたしひとりしておいて下さい」

「おひとりです」

憚良はまじまじと師僧の顔を見すえた。

「憚良たちは尼の家へ去りなさい。ほんの二、三日のことです」

「二、三日のあいだに和上は何をなされるのですか」

「朝夕、その戸口でお念仏をとなえてくれるだけでよろしい」

「和上……これで、永のお別れになるのでしょうか」

憚良は万感が迫ってきて、思わず涙声になった。

「念仏をとなえる者に別れも出会いもない。死も生もない。この点はくり返し言うてあるはずです」

「それは承知していますが……」

「法身は汚がれないが、色身は醜い」

善導はきっぱりと言いつ放った。

法身とは仏法を信じ、その形而上の世界で永遠に生き続ける命である。色身とはこの生身の肉体を指している。「涅槃経」でクシナガラ樹林で釈尊は、入滅にのぞんで若き仏弟子阿難に自己の死を法身と色身とに分けて教えさとしていたのだった。

憚良たちは師が命ずるままに蘆の床を敷きのべると、草庵を出た。戸を立てた。

尼の母子とまんじりともしないで一夜を明かした憚良と浄業は草庵の戸口に向って立った。高声で念仏をとなえはじめた。じきに内部から力強く唱和する声が響きかえってきた。

「和上さま、大丈夫ですか」

憚良は呼びかけないではおれなかった。

善導にかわって浄業が答えた。

「和上は健在ですよ。ほらこの隙間から金色の光りがさし出ています」

戸口の端を指されたが、憚良には何も見えなかった。阿弥陀仏への信心が浄業に遠く及ばなかったからであらうか。

「ここへ粥を置いてまいります。和上さま、ひと口でも召上がって下さい」

憚良は戸口をこじ開けて粥の椀を押しこんだ。その折、ちらり見やった善導の寝姿は、大地に横たわる枯れ木の如く微動だもしなかった。

たまらなくなった憚良は、まどついていた黒

衣を善導の胸目がきて投げつけた。

「和上さま、お寒くはございませんか……春でも夜は冷えこみます。これを掛けて下さい」

弥陀の化身が発する金色の光りを見ることが出来ない憚良——信心は浄業に劣っていたかも知れないが、善導の「色身」へ寄せる情愛はより濃密だったと言えたであらう。

夕刻まで待つわけにはおれない憚良たちは日がな戸口の前で念仏を続けた。そして日暮れに新しい粥の椀を差し入れたが、朝の分はひと箸も減ってはいなかった。ただ枯れ木のように仰向く善導の身体は黒衣ですっぽりおわれていた。

翌一日も同じことがくり返された。憚良たちの念仏に、草庵内からは力強い声がかえってきた。

その晩、さすがに疲れはてた憚良たちは尼母子のかたわらで泥のように眠りこんでしまった。

「朝ですよ」

浄業の声で目をさました。

「和上さまは……」

惺良は正体もなく眠りこけたことに恥じて戸外へ飛び出した。だが、そこは降るような星月夜で朝にはほど遠かった。

「やっぱり」

と浄業はひとりうなずいている。

「未だ夜は明けていませんね」

「朝の光りではなかったんです。弥陀のみ光り……」

「和上さまのお身体が発した光りだったんですか」

二人は草庵の方へ走りながら、あわただしい会話をかわした。

そして、戸口の前へきて声をそろえて念仏した。しかし室内から応ずる声は遂になかった。

「和上さま！」

惺良は荒々しく戸を開けて駆けこんでいっ

た。

寝姿は昨日垣間見たものと寸分も変ってはいなかった。安らかに眠っている如く、善導は惺良が投げこんだ黒衣に頸まで埋めて両眼を閉じていた。

わずかに顔だけが反りかえる位相であったが、これは仰臥しながらいつも西方浄土を見つめようとしていたためだからであろう。惺良が黒衣の裾をめくると、胸先に置いた手はしっかりと合掌していた。

「醜いなんて……色身も限りなくお美しいではありませぬか」

惺良は死体をゆさぶらばかりにして泣きじゃくった。

「なお金色の光りが、さし出ていらっしやる」

浄業はまぶしげに眼をしばたいた。

足もと近くに端座した泥亀の妻とその幼児とは眩くように念仏を合唱していた。

王古は「新修往生伝」で入寂の模様を以下

☆☆

入
寂



のように書く。

——住する所の寺院の中において浄土の変相を画く。忽ち催して速に成就せしむ。或人、その故を問うに即ち曰く。「吾まさに往生せんとす。住すること三兩夕べとなるべきのみ」と。忽然として微疾あり。室を掩（お）い、怡然として長逝す。春秋六十九。身体柔軟にして容色は常の如し。異香、音楽久しくしてまさに歇む。時に永隆二年三月十四日なり。

永隆二年（六八一）はこの年十月に「開耀」と年号を改めたので開耀元年とする史書もある。

皇帝高宗は相変らず病みがちで、王城の実権は則天武后が完全に掌握していた。

善導の入寂をこんなふうに叙述する別伝もある。

五

——導、謂レ人曰 此身可レ厭 諸苦逼迫 情偽変易、無ニ暫休息ニ
乃登ニ所居寺前柳樹ニ 西向願曰 願
仏威神驟以接レ我 観音・勢至亦来
助レ我 令「我此心不レ失ニ正念ニ
不レ起ニ驚怖ニ 不兩於弥陀法中以
生乙退堕^甲 願畢於ニ其樹上ニ 投レ
身自絶 時京師士大夫傾レ誠帰信
咸収ニ其骨ニ以葬
高宗皇帝知ニ其念仏口出ニ光明ニ
又知ニ捨報之時精至如レ之 賜ニ寺
額ニ 為ニ光明ニ焉。

善導（導）はこの身にもろもろの苦が迫ってきて、心情が偽り変易して、暫くも休息することなきを厭うた。すなわち居所の寺で前庭の柳樹に登り、西に向って願って曰く。

「願くば仏の威神、はやく以て我れを接し、観音・勢至（両菩薩）来りて我れを助け、我が心をして正念を失わず、驚怖を起さず、弥陀の法の中において退墮を生ぜざらしめんことを」と。願いおわってその樹上より身を投じて自殺す。時に京師の士大夫、誠を傾けて帰信し、みなその骨をおさめて葬る。

そんな記述である。

さらに皇帝の高宗は、善導が念仏をするとき口中から光明がさし出ることを知り、また捨身時にも同じ光りを発したことを知り、その寺に寺額を賜り「光明」と名づけたという。

南宋の戒珠が編述したと言われるこの「淨土往生伝」はその前段で、善導の熱烈な教化ぶりを描述している。

——京華諸州僧尼士女、或投_二身高嶺_一

或寄_二命深泉_一 或自墮_二高枝_一

焚_レ身供養者略聞_二四遠_一 向_二百

余人_一 諸修_二梵行_一 棄_二捨妻子_一

者 誦_二阿弥陀經_一 十万至_二三十万

遍_一者 念_二阿弥陀仏_一 日得_二一万

五千_一 至_二十万遍_一者 及得_二念

仏三昧_一 往_二生淨土_一者 不_レ可_レ

知_レ数。

厭離穢土、欣求淨土をそのまま捨身自絶で実践し、あたかも善導の念仏教団が「自殺者の群れ」であるかのように描きあげているのである。

これらに曲筆舞文があることは疑う得べくもなく、例えばそんな事実があれば、たちまち司直の手が「禁教」の厄に見舞われたであろう。

すでに善導と同じ時代に生きた道宣の筆に

なる「統高僧伝」では以下のような自絶事件を紹介している。

——ある人、導に告げて曰く。今仏名を念すれば定めて浄土に往生するや否（不）や。導曰く。念仏すれば定めて（浄土）に生まる。その人、礼拝しおわり、口に南無阿弥陀仏を誦して、声々相次で光明寺の門を出づ。柳樹の表にのぼり、合掌して西を望み、（身を）倒して身を投じ地に下る。遂に死す。

事、台省に聞こゆ。

一人の狂熱者が出現し、善導に念仏往生の成否を問いただし、それが成ると聞くや念仏をとえながら光明寺の門を出て、その柳にのぼって念仏をるなえながら自絶して果てたというのである。

たった一人の自絶者があらわれても「事、

台省に聞こゆ」だった。つまり大事件なのである。

それが戒珠の「浄土往生伝」の如く念仏三昧して自絶する者が「数えることを知るべからず」ほど続出したのでは重大な社会事件となっていたであろう。そんな事実は当時の史書が全く紹介しておらず、同時代の道宣が狂信者の一例だけを紹介した意味の重さが理解できる。さらには終南山で善導と一時期、ともに修行生活を送った道宣は善導に先立って入寂しているのだ。

では戒珠はなぜこの事件を善導の往生相とダブらせて書き遺したのであろうか。いわんや前段では善導教団があたかも「捨世」か「自絶」の人間集団かのような描きかたさえしている。

入門してきた懷感に自絶の非を説き、生き抜くための念仏を教示した善導だった。いわんやその思想核芯は「二河白道」の譬喩でも明白なようにどんな苦しく困難な人生行路に

あっても阿弥陀仏の慈悲一点を信じて、狭いひとすじ道を前進せよ、と教えた善導であつた。内外的どちらの条件から考えても、あり得ない往生相なのである。

これも推量の域は出ないけれど、戒珠が生きた南宋浄土教という背景からこの「往生伝」を検証してみなければならぬ。戒珠（九八二—一〇七七）は九十三歳という長寿を全うした念仏者であつた。この時期における浄土教は、とりわけ江南地域において盛んで、とりわけ熱狂的な性格を持つ教風だった。事実が現代の研究で明らかにされている。白蓮社、浄業会、西帰会、繫全会などの「捨世」結社が輩出した。

例えば昭慶省常（九五九—一〇二〇）は西湖のはとり昭慶院に住して阿弥陀の木像を刻みつつ「華嚴浄行品」を血書し、百二十三人から成るエリート念仏者を選び出し俗世と絶縁、自殺まがいの往生相を至上の目的とした。

これは四世紀初に現れた廬山の慧遠（三三四—四一六）を慕う原始浄土教の流れを汲む系譜で、省常自身はその「蓮社七世」と称した。

ちなみに省常は、慧遠を初祖とするこの「蓮社二世」に唐の善導を推している。とあれば善導の念仏も熱狂的な性格でなければならぬ。その往生相は「忽然微疾、室を掩いて怡然として長逝」ではいけないのである。あまり病みぬかず、突然ちよつと思つただけで安らかに死んでいったというのである。

善導が死んで三百年十年が過ぎてゐる。一代の念仏者として華麗な教化活動をしたわりには最期はもの静かであつた。話題を残すことなく消えるように西方浄土へ旅立ってしまった。その像をいつそう巨視化させるべく、かつては熱狂的な浄土教ブームを背景に、道宣が紹介した柳樹から投身した男の光明寺事件をそのまま借用したと考えられる。道宣が「事は台省に聞こゆ」と、やや複雑なニュア

ンスをほのめかしているのに「光明寺の寺額下賜」と栄光へ飛躍させてしまった。

同じ時期、少しおくれて撰した王古の「新修往生伝」(二〇八九)は戒珠の文を増補重修し「柳樹投身」と「怡然長逝」と二種類のものを遺しているのも南宋の時代背景をよく伝えると言えるであろう。

「観無量寿経」は「下品下生」で、五逆十惡をなしてきた愚人の命終を語る。

——かくのごとき愚人は命終る時に臨みて、善知識の種々に安慰して、ために妙法を説き、教えて仏を念ぜしむるに遇わん。この人、苦に逼(せ)まられて、仏を念するに違(いとま)あらず。かの善友、告げて曰く。「汝よ、もし(仏を)念することあたわざれば、まさに無量寿仏(の名)を称うべし」と。かくのごとく、至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足し

て南無阿弥陀仏を念々のうちに八十億劫の生死の罪を除き、命終る時、金蓮華のなか日輪のごとくにして、その人の前に住するを見ん。

惡業をかさね、仏法の修行を全くやっていない下品下生の愚人が命終に臨んで、善知識なる立派な僧からいろいろと話を聴問しても心が安まらず、ことに仏を念することが出来ないときは無量寿仏の名をとえよ、と説いている。

ここである「仏を念する」とは、法然が「一枚起請文」で指摘する「觀念の念」である。つまり觀想憶持して仏の姿を見ることを意味する。想いを凝縮させて阿弥陀仏の現前し給うお姿と遇うことである。

しかし、呼吸も苦しくてそれもかなわないときは、口に出した仏の名を呼び続けよ、とすすめているのである。そうすれば必ず「生死の罪」が除かれ、浄土に往生できると保証

する。

善導が主唱した称名念仏の論点がここに定着している。どんなに智慧深いつもりでも、修行をつみかさねたつもりでも、末法に生きている身は下品下生たることをまぬがれない。だから「観念の念」はかなわぬ身ということになる。

その念仏理論はともかくとして、命終に至るまで「仏を念じようとし」それが出来なければ「仏の名を称する」とは、とことんまで生き抜く、息を引き取る瞬間まで行動を継続することを意味している。

自絶行為は、それ自体が途中で生きること放棄したのであり、念仏に甚だしく違背した姿と言わねばならない。念仏となえること、それは息ある限り生き抜く人間の姿なのである。

念仏こそ生きることの証かし。その念仏を絶対無二とした善導に、生を放棄する自絶行為などあり得たであろうか。

六

善導の遺骸は神和原の草庵脇に葬られた。弟子たちが日をついで各地から訪れ、念仏をささげた。

応待はもっぱら少年憚良と突厥人泥亀の妻だったが、浄業もしばしばやってきては二日三日と泊って善導をしのんだ。

この浄業がやがて十三層の墓塔をこの地へ建立することになる。そして自身もその傍らに永眠し、七層の墓塔が現存している。

ここは香積寺と呼ばれ、善導の弟子懷憚が造立主となった。宋敏求の「長安志」にも、

——開利寺、在縣南三十里皇甫村、香積也。永隆二年建。

なぜ香積寺と名づけたのか。善導の生地、

安徽省泗州の名刹にちなんだのであるか。

ところで浄業もが、その伝「大唐竜興大徳、香積寺主、浄業法師靈塔銘並序」によると、唐政庁地方公吏の家に生まれ、二十歳の声を聞いたころには出家している。「暫年（ちようねん）にして法を慕い、弱冠にして榮を辞す」とある。

さらにこんな記述が続く。

——高宗の忌辰に方階落彩し、縋を轆ること七日、施して法座に登る。観經と疑論の元徴を剖析す。

皇帝高宗が崩じたのは弘道元年（六八三）の十二月である。五十六歳であつた。善導が入寂した翌々年にあたる。この年に落彩した浄業は僧ではなかったのではないか、という疑問には当時の僧階制度がこれに答えてくれるはずである。

唐政庁では僧階の度牒を与える場合、国家

試験を実施した事実が記録されている。例えば「大唐大慈恩寺三蔵法師伝」に高宗の顯慶三年（六五八）こんな記述がある。

——勅先委_二所司_一簡_二大徳五十人侍者各一人_一後更令_レ詮_二試業_一童子一百五十人擬_レ度至_二其月十三日_一於_レ寺建_レ齊度僧命_二法師_一看_レ度。

大徳五十人の侍者各一人に試験を実施した。さらに童子百五十人にも度牒を与えるべく、その試験委員を玄奘に命じたということである。

童子とは得度した少年たちで、侍者は無位の行者を指している。沙弥とも呼ばれる。童子は二十歳前もが、行者は五十五歳にもなる中年僧がふくまれる実例がある。

私度僧（ひじり）と官度僧（試經度僧）の違いである。

浄業はこの私度僧沙弥の身分で、懐感のもとで修行を積んでいたものと思われる。そうでなければ弘道元年、官度僧に合格した途端に「観無量寿経」や懐感の「釈浄土群疑論」を講ずることなど出来ないはずである。無資格ではあっても学殖の蓄えは豊富だったにちがいない。

だから落彩剃髪が善導の死の二年後だからと言って、浄業を善導面受の弟子であることを否定する根拠とはなり得ない。

その日、浄業は胸いっぱい花をかかえて神和原へあらわれた。

「和上のお墓をこの花で飾りましょう」

「まあ綺麗なこと。どこに咲いていたのですか」

尻は鼻先を近寄せて匂いを嗅ぎ取りながら眼を細くした。

「大慈恩寺の池のほとりで摘んできました。善導和上にとっては思い出も深い池だったでしょうね」

玄奘三蔵がインドから帰国し、太宗がこの寺を建立し持ち帰った經典の翻訳にかかった折、善導も選ばれてその訳経僧となって大慈恩寺に住みついたのだった。

「和上は現在、もっと美しい花園のお浄土にいらっしゃるでしょうけれど」

少年憚良は補則した。生前のことに未練を残すのは「願生者」善導の本意ではないかもしれない。

みんなで善導を埋葬した盛り土に花を植えはじめた。だが浄業が持参した花の量は余りにも少なかった。盛り土の頂上部を彩っただけで終った。

「これだけでは寂しいわね」

尼が不満を洩らした。

「花は、もうない」

浄業の諦めを憚良が、

「野花なら、この下にいっぱい咲いてますよ」

と元気づけた。

「そうだわ、小川の岸へゆけば……春ですもの」

尼も浮き立ってきた。

みんなは神和原の台地を降りていった。清らかな小川が流れ、岸辺で野薔躑や石南花が咲き乱れていた。

「花園はすぐ足もとにあった」

浄業は何か教示を受けたように自然の花晶を見渡した。花咲き乱れる莊嚴の極楽浄土は遠い地点に実在するものではない。つねに足もとの手近なところにあったのである。それに気づかない愚かな眼、迷いの心――。

「そうだ。この花々、摘むのではない。移し植えるのです」

浄業はみんなに命じた。

「根ごと持ってゆくかね」

「和上さまのお墓で、いつまでも咲き続けてもらいましょう」

「浄業さま。死者にお花を供える風儀は昔からあったのでしょうか」

少年憚良が石南花の根を掘りおこしながら訊いた。

「經典によれば、ずいぶん古えからのことらしいでしね」

「何のために供えるのですか」

「さあ……」

「美しく飾るために？」

「そればかりではないようです。花で飾られたお浄土を、生き残った私たちが見えるお墓の外面でも再現するのでしょうか」

「そのお浄土が花で飾られているのは、なぜでしょうか」

少年の追及はきびしかった。何事もおろそかにはしておれない若さであろう。

「お浄土がなぜ花で飾られているかねえ」

浄業には明快な答えをかせすことができなかった。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）

一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十四巻 五月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十二年 四月二十五日 印刷

昭和六十二年 五月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八―八二―八七番

好評

浄土宗勤行の解説

B6判三六六頁
価三、六〇〇円

日常勤行式、歎仏偈、三尊礼、真身観文、阿弥陀経、一紙小消息、歎仏頌、讚重偈、光明歎徳文、後夜と晨朝礼讃偈、六時礼讃無常偈、発願文、五懺悔、広懺悔、帰三宝偈、三帰礼、祝聖文、広開偈、還相回向偈、自信偈、降魔偈、歎経偈、本誓偈、外に三偈文

法然上人等法語で綴る 念 仏 の 法 門

B6判四二四頁
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳 念 仏 の 要 諦

B6判二九六頁
価二、九〇〇円

全 訳 法然上人 勅 修 御 伝

B6判八四七頁
価六、八〇〇円

和 訳 浄 土 三 部 經 集

B6判四七四頁
価二、五〇〇円

和 訳 法然上人 選 択 集

B6判三八七頁
価二、五〇〇円

和 訳 善導大師 観 經 四 帖 疏

B6判五八四頁
価三、五〇〇円

和 訳 善導大師 六 時 礼 讃

B6判二六五頁
価二、四〇〇円

檀信徒用 浄 土 宗 の お つ と め

一部価四七〇円

○葉書でお申込下さい。代金(送料実費)は後払(振替用紙同封)

訳と編 村 瀬 秀 雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

発 行 所 常 念 寺

電 話 0465-43-1352

振 替 横 浜 3-8296番